

Illustration: Ohtsuka Ichio

■ Trans-size ■



I | n | t | e | r | F | e | e | l | D | e | s | i | g | n |

インターフィール・デザイン

弁をこじ開けよ!

メーリングリストで知り合い、西麻布のバーでコンタクトした日米2人の美女を前にして、あまりにも瞬時に、そして流暢に日本語と英語を切りかえながら全員的话题を独り占めする国籍不詳の男の言語構造に疑問を持ち、私は尋ねた。「ベン。君は考えるときは一体どちらの言語で考えているんだい?」「そうだなあ。考えたこともないけれど、そう言われるとそのどちらでもないような気がする。言葉になる前の段階と言うか、強いて言うならば、イメージで考えている感じかな」

これが、日本で生まれ子どもの頃からアメリカンスクールに通い、アメリカの大学を出て日本で暮らしている友人の答えだ。「でも、君のようにそこまで両方とも完璧な奴はざらにはいないよ」「まあ環境のおかげだろうな。そう言えば高校のときに、生物の先生がこんなことを言っていた。人間の脳には言語能力の発達をつかさどる器官があって、それにはバルブ、つまり弁がついている。そいつが開いている時は

言語を憶えることができるけれど、そのバルブはどうやら4~5歳で閉じてしまうらしいんだ。だけど、なかには一生開きっぱなしって奴もいて、おかげでそいつがその気になれば何か国語でも流暢に操れるってわけさ。俺の場合はそれが閉じる前にあらかた両方入っちゃったということじゃないのかな。まあバルブってのは1つのメタファーだけれどもね」

通訳に求められる能力とは、たとえば日本語を聞いて瞬時に英語という他の言語に置き換え、またその逆の流れである英語を聞いて日本語に置き換えるという、双方向の情報翻訳能力だ。そのために必要なものは、単に日本語とその文化背景を知るのみならず、英語とその文化背景の両方を知ることである。良質な通訳とは、地と図の関係で言うと図としての単語の意味と文法を熟知するだけでなく、地である文化背景をも知り尽くした双方向の情報翻訳者なのだ。この情報翻訳者がいるおかげで言語の弁が開かれ、2つの異なる文化領域が開口し、情報流通が始まる。すなわち、異

文化間でストレスのない会話が成立するというわけだ。

「出会い」の次は「翻訳」

ベン、バーで日米2人の女性とコンタクトし、異なる母国語のために微妙なニュアンスまではコミュニケーションできない私を含む3人を同じ笑いの渦に巻き込むことに成功し、次回のデートをセットしてくれた。彼の能力と役割とはなにか? そのときの彼は、異なる情報領域をつなぐ優秀な情報翻訳家であり、異なる情報領域を開口するバルブ、すなわちトランスドアであった。ネット社会の2つの価値にあてはめてみよう。過去に、インターネットのメーリングリストで知り合ったわれわれ4人が接触し、都内のとあるバーで会うという価値がコンタクトバリュー(情報接触価値)である。そしてベンがバーでのファーストコンタクトを談笑まじりに自在に操り、異なる情報領域を開口した結果生まれたのが、友情関係という名のトランスバリュー(情報翻訳価値)だ。その後この関係を通じて思わぬビジネスが



I | n | t | e | r | F | e | e | l | D | e | s | i | g | n |

インターフィール・デザイン

発生したり友人同士が恋に落ちたり、つながり合って拡張した情報領域の中で有形無形の価値交換が連鎖して、トランスバリューが増殖している。

ネット社会の恩恵であるトランスバリューを創発するためには、コンタクトするのみならず、異なる情報領域が開口するように、うまく情報翻訳をする必要がある。そのために必要なデザインメソッドである基本的なトランステクニク(情報翻訳技術)を、具体例とともに見ていこう。これから数回にわたって紹介する各テクニクは、単独でも成立するものではあるが、それぞれを組み替え、編集して、新たなテクニクを構築するためのコンポーネントとして捉えてほしい。その理由の1つは、情報量もその交換領域もますます拡張している現在、個々が新たなテクニクやバリエーションを発見し、自分流のテクニクとして構築することが重要であるからだ。さらに言うと、これらのテクニクは視点の取りかた次第で、他のテクニクに分類されるような多様な捉えかたが可能なものだからだ。

では、まず情報の量や形といったサイズそのものを伸び縮みさせることで見る者の視点を変更し、新たな認識を呼び起こす“トランスサイズ”の視点から、翻訳テクニクを見ていこう。

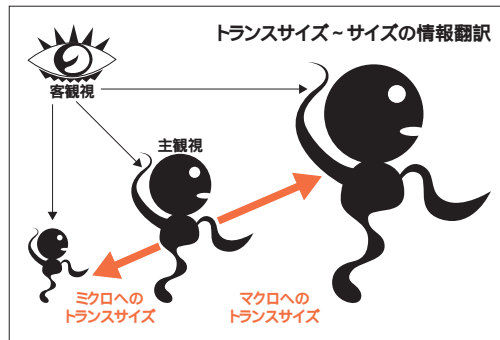
100人村のトランスサイズ手法

「世界には63億人の人がいますが、もしもそれを100人の村に縮めるとどうなるでしょう。100人のうち52人が女性です。48人が男性です。ご存じの方も多いと思うが、この文章は先ごろ話題になった「全世界を100人の村に縮小してみたら」というタイトルの作者不明のチェーンメール^(*)の冒頭である。

その中からいくつかのセンテンスを、サイズ情報翻訳の例としてサンプリングしてみよう。「90人が異性愛者で10人が同性愛者です。すべての富のうち6人が59%を占めていてみんなアメリカ合衆国の人です。すべての富のうち74人が39%を、20人がたったの2%を分けあっています。17人は中国語をしゃべり、9人は英語を、8人はヒ

ンディー語とウルドゥー語を、6人はスペイン語を、6人はロシア語を、4人はアラビア語をしゃべります。これでようやく、村人の半分です。あとの半分はベンガル語、ポルトガル語、インドネシア語、日本語、ドイツ語、フランス語などをしゃべります。33人がキリスト教、19人がイスラム教、13人がヒンドゥー教、6人が仏教を信じています。5人は、木や石など、すべての自然に靈魂があると信じています。24人は、ほかのさまざまな宗教を信じているかあるいはなにも信じていません」

いかがだろうか？ あなたの世界に対する現状認識が更新されたか、もしくは新たに創発したのではないだろうか。このチェーンメールが注目された理由は、人類全体の人口を私たちに馴染みの深い「100人」^(*)というサイズに縮小して対象化してみせたところだ。「63億人」というつかみどころのない巨大な数字を、その本質を失わないよう、私たちが身近にイメージできるものに翻訳することによって見る者に別の視点を提供したというわけだ。



I | n | t | e | r | F | e | e | l | D | e | s | i | g | n |

インターフィール・デザイン

街はトランスサイズに満ちている
 数の縮小だけでなく、ビジュアルも縮小し、地球と人類の現状の視覚伝達に成功したのがインゴ・ギュンター^{(*)3}である。1988年に始まった『ワールドプロセッサ』と呼ばれる彼のプロジェクトは、カラフルにペイントされたさまざまな地球儀の展示からスタートした。宗教分布、森林の減少、核保有国など、地球のさまざまな問題が圧縮された地球儀の1つ1つを見ることで、私たちの社会が抱える病巣をグローバルに直観できるものだった。

日常的なところでは、建築に使われる図面もトランスサイズだといえる。建築物のミニチュアモデルを創ることで、景観とのバランスや空間の配置など立体的な把握が可能になってくる。さらにCADを使用して創られたCGモデルにバーチャルゴーグルを装着すれば、完成前の建築物を実際のサイズでシミュレーション体験し、不具合を修正することも可能になる。サイズの変換によって新たな視点を提供するのは広告やエンターテインメントの十八番だ。よく目

に付くのが人や動物そのもののサイズ変換だ。ある朝起きたら自分の体が豆粒大に小さくなっているのに気づき、日常が大冒険になるストーリー。あるいは小さな子どもが巨大なサイズに変身して大慌てするストーリー。難病の患者に治療を施すためにナノレベルに小さくなって、人体という大自然を探検する映画『ミクロの決死圏』。玩具チョコQのサイズを拡大して公道を走れるようにした電気自動車の販売など、挙げていくとときりがない。このようにトランスサイズはサイズの情報翻訳によって見る者に新たな視点を提供してくれる、トランステクニクである。

今日の結論。

サイズを変え、新鮮な視点で見よ!

近づいてもだめなら引いて見よう。見づらいものをもっとよく見るために、気付かなかったものに気付くために必要なものこそ、情報の本質を変えずにサイズを変換することで新たな視点を獲得するトランスサイズなのだ。

Think Favorite!

編注:

- (*)1 『100人の村』チェーンメール: 『The Global Citizen』誌に掲載されたDonella H. Meadows (1941 ~ 2001) の『人口1000人の村の現状』という記事がこの原点であるとも言われている。
- (*)2 いかなる経緯であったのかは不明だが、村の規模を1000人から100人にさらにトランスサイズしたことが、ネットノア(ネット上の口コミ)で流布する都市伝説の一形態としての拡散スピードに影響を与えたのだとしたら興味深い。
- (*)3 インゴ・ギュンター(Ingo Gunther, 1957 ~)メディアアーティスト。一連の『ワールドプロセッサ』のほか『難民共和国』などのプロジェクトを展開し、グローバル化する社会へさまざまなメッセージを投げかける。



photo: Nakamura Taku (@nrmn)

七瀬至映 Nanase Yukiteru
 クリエイティブディレクター&プロデューサー。情報を受発信する個人が主役となる時代のコミュニケーションの可能性をテーマに、マルチな活動を続ける。近著に『クリアロン - 創造性遺伝子』、インターネット社会の新たな価値創造の方法に迫る『サクセス・バリユー・ワークショップ』(いずれも発行: デジタルハリウッド出版局)がある。
 「あなたの情報デザインテクニク投稿大歓迎!」
<mailto:yukiteru@creator.net>



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp